アート展

ネリー・アガシ
《mountain wishes come true》

技術協力：山梨県産業技術センター
制作協力：槙田商店
参考作品｜From the exhibition "No Limestone, No Marble"　"The Quiet Before the Storm" 2022
Photo by Clare Britt
Sound: Ryan Packard

シカゴを拠点とし、多領域を横断して活動するアーティスト、ネリー・アガシは、この度日本では初となる大規模インスタレーションを旧山叶（やまかの）で発表する。旧山叶は、長年に渡り、富士吉田の織物産業を支えてきた存在だったが、現在はその店舗と倉庫は整理され空いている。市内にはその他にも行く末が決まっていない空き店舗や建屋があり、旧山叶もそのうちのひとつだ。
「mountain wishes come true － 山の願いは叶う」（旧社名・建物の直訳）は、アガシと旧山叶、その周辺地域との対話を公開する場となる。アガシは伝統と革新の架け橋となり、独自の芸術的ビジョンと地元の特性を巧みに融合させている。また時間、記憶、拾い物、想像力といった物理的かつ形而上学的な要素を用いて、空間の歴史、これまでの変遷、そして無限の可能性を秘めた未来に触れようとしている。
この展示では新たに空っぽとなった建造物で、現在取り組んでいる作品や実践、そして、彼女と非常に親しい人たち（10歳の息子ヨナや、長年のサウンド・コラボレーターであるライアン・パッカードなど）や、ここ数ヶ月の間に出会った人たちとのコラボレーションを多数紹介する。

清川あさみ　《わたしたちのおはなし》

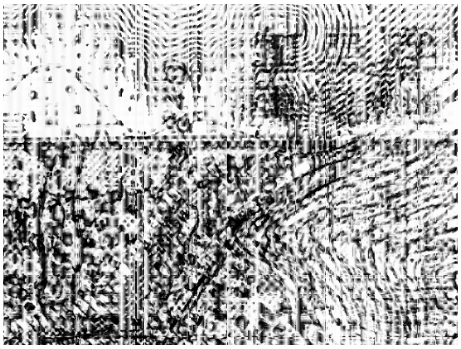
参考作品｜Serendipity, 2023

古びた３階建ての日本式の蔵があり、その２階と３階に作品が展示してある。周囲は板敷きの床と壁である。素っ気なく、また木造建築の温かみが感じられる。この特異な空間に清川は８点の作品を展示している。２階には数点の本をベースにした作品がイーゼルに置かれている。本は入念に刺繍され、その糸は本のページの外へとあふれ出ている。楽譜をベースにした作品「別れの歌」は、楽譜の上に刺繍を構造的に配置したもので、リズムを感じさせる構成主義的なデザインとなっている。その中の一点は、本展のために作られたもので、木花之佐久夜毘売（このはなのさくやびめ）の神話からとられたものだ。３階に上がると大きな作品 Serendipity シリーズの新作がある。重厚なマチエールを持ち、絵画的である。刺繍という技術は糸の技術である。絵画に糸という素材を持ち込むことは、絵画を彫刻にすることだ。清川は２次元と３次元の間を往還しつつ、そこに絵画、音楽、文学のポエジーを生み出している。

ジャファ・ラム《あなたの山を探して》

テントか傘のようなインスタレーション作品は、観客の視覚を切り取り、風景を変える働きを持っている。古い工場の跡地に立つ廃屋の屋上に設置されたこの作品から富士山のある風景を眺めると、富士山は特殊なアングルと異質な切り取り方で、普段とは違って見えるだろう。それは今まで見てきたものを再度見直すこと、新鮮な目で見直すこと、新たな視点で見直すことを促している。アートとは、見る視点の特異性のことなのだ。この作品に使われた布は、富士吉田の機屋から収集した、B 反と呼ばれる傷などの都合により一般に流通しない布で出来ている。そうした生地を使うことは持続可能性に対する真摯な回答でもある。元々香港で発表された初期には、雨傘の廃品からとられた布を使っていた。そこで、この作品の系譜はずっと環境問題がテーマだったことがわかるだろう。ジャファは現在、ヨーロッパでも侘び寂びのセンスを持つアクセル・ヴェールヴォート・ギャラリーに所属し、2024 年にはオランダでも作品を発表する予定である。

Sponsor：Nelson Leon
参考作品｜©Axel Vervoordt Gallery and Artist



顧剣亨《Map Sampling_Fujiyoshida》

顧剣亨は「デジタルウィービング」という、複数のデジタル写真を手作業で一つひとつのピクセルごとに「編み込む」独自の手法によって、複数のイメージが重なり合う写真作品を表現する。先染め生地を織り込む時に複数の糸が重なり合って現れる錯覚から着想した本作では、富士吉田市の様々な時代の地図を「デジタルウィービング」を用いて編み込ませ、二枚の透け感のある生地にプリントすることで、新たに立体感のあるイメージを浮かび上がらせる。
その時その場所の意義や史的役割を示してくれる地図という時空間の断面の中には、「生きた歴史」が宿っていると顧は言う。現地リサーチを経て作られた本作では、富士山信仰や、織物業の衰退と発展の推移とともに変わっていった富士吉田市の「生きた歴史」が、二枚の生地の重なり合いの中で錯覚として召喚される。プラットフォーム上から俯瞰する我々の視点の動きに合わせて見え隠れし、時にうねるように遷ろう地図たちの新たな表情は、たしかに「生きている」と形容すべきなのかもしれないし、あるいは亡霊的とも言えるだろう。

協力：Yumiko Chiba Associates

池田杏莉《それぞれのかたりて / 在り続けることへ》

何十万枚もの薄い皮膚のようなものが、何重にも丁寧に、使い古された家具や衣類たちの表面にレイヤーされている彫刻作品たち。機織り機など大型機械を生産していた旧山叶で実際に使われていた家具やユニフォーム、そして池田が富士吉田市でリサーチの中で会った人たちの古着や私物が繭のように覆われている。表面を形作る薄い”皮膚”たちは、富士吉田に住む、テキスタイル産業をこれまで支えてきた人たちの手足をシリコンで型取りして一枚一枚作られている。それはいわば誰かの手垢のようで、ゆっくりとモノや空間の表面に積雪され、数多の職人や従業員がかつてはこの工場跡を行き来していた歴史を示唆する。
池田は喪失の痕跡を、モノや空間の中から浮かび上がらせることで、それぞれの”かたりて”の物語の収束点を作るという。床に敷かれた黒い落ち葉のような皮膚たちを踏み割りながら工場跡の残り香に「耳をすませる」我々にとって、それは畏怖として映るかもしれない。ただ、時に芸術はそういった静かな向き合いを見届けるところに、意義があると考える。

Photo by Anri Ikeda

パシフィカ コレクティブス《Small Factory》

PACIFICA COLLECTIVES は名前どおり、コレクティブのように国内外のアーティストとコラボレーションしてインテリア雑貨を制作するブランドである。糸の手染めから制作までの緞通職人たちとネットワークをもち、人柄の相性などを考えながら作家を選定する。実にコレクティブ的であるその丁寧なプロセスもあって、現代のサブカルチャーとの接続も多く、製造・販売を超えてシーンを牽引する一躍を担っている。旧絹屋街の糸屋だった会場では、何色もの手染めの糸巻が制作途中のアートラグに刺さった状態で展示されている。現代美術と伝統技術のコレクティブ（＝集合）として、我々の日常と芸術の交点となる場を生み出すこと。時には何十色もの糸を集合させて作家の思い描く画を表現する PACIFICA COLLECTIVES の制作と活動には奇しくも比喩的な類似性を感じる。SARUYA HOSTEL では、ポップアップを兼ねたインスタレーションが展示されている。旧糸屋での展示と併せると、お店の装いもまた芸術実践の延長線上にあることがわかる。プロセス自体がカルチャーを”編み出す”PACIFICA COLLECTIVES のその様子を、富士山麓の織物産地文化の成り立ちと重ねて見ることができるのは、本芸術祭にとって大変有意義である。

沖潤子　《anthlogy》

沖はラグのような布に刺繍を施す。刺繍の描き出すイメージは、比較的単純な円形あるいは、楕円形のものが多い。その大きな図柄から周辺に多数の糸が伸びている。地となる布は、洗濯物のように上から垂れ下がり、あるいはパッチワークした旗のように四角い形で壁に展示される。さらに平面から逸脱し、白い石に針を刺したような作品や、かごの中に入れられたクッションの様な物体、さらに箱に入った人間の身体の一部のような不定形の作品もある。いずれの場合にも糸が縫い付けられ、重ねられ、彫刻を覆い、織物のような表情も見せている。作品のあるものは女性器の隠喩にも見えるが、一方で古びた工芸品や古布のように干からびた味わいがある。その点を敷衍して言えば、ここに見られる美学は詫び寂びに通じるものなのかもしれない。いずれにしろ、抽象的でフェティッシュな作品群は、糸という素材を絡めながら、不可解な魅力を持って存在している。作者は刺繍の枠を超えて、その領域を拡張しつつある。

協力：KOSAKU KANECHIKA
作品イメージ｜© Junko Oki, Photo by Yasushi Ichikawa

筒 ｜tsu-tsu
《unsound dresser：化粧箱、鳴ラナイ》

筒はドキュメンタリーアクティングという手法を、パフォーマンスの形式としている。それは現実の人物や事件を取材し、演じる一連の行為からなっている。筒という感覚は幼少時より習っていた日本舞踊から得た「筒（つつ）」という身体感覚についての名称からきているという。それは役を演じるときに筒の状態を経由して、役柄に転身することを表している。今回の作品では富士吉田市に昔から伝わる富士山と金色姫と織物の伝説にテーマを取ったパフォーマンスを演じる予定である。その舞台として、筒は映像やインスタレーションなど一つの環境を作り出し、それを用いて演技を提示する。また付随して街に生きる人の語りを基に、音声ガイド型のオーディオ・パフォーマンス作品も制作する。鑑賞者が街を歩く事を通して、そこに堆積した記憶と出会う機会をつくることに挑戦している。

＊パフォーマンス：毎週金土日の 13:00-, 14:00-, 15:00-
　11/23(木・祝)は実施
＊オーディオ設置場所：下吉田駅・旧山叶，料金：1000 円

セノグラフィ：板倉勇人　サウンドエンジニア：安齋励
制作補助：木下真紀　助成：公益財団法人クマ財団
協力：6okken

ユ・ソラ　《日々》

ユ・ソラの扱う素材は布と糸である。比喩的に言えば、布地は基本的に展示空間内部の事物の表面の皮膚を形成する。それらの皮膚を形にするのは、皮膚を継ぎ合わせる黒い糸の働きである。この役割分担は、服や着物を作るときも同じだろう。しかしユはそれを衣服ではなく一つの部屋のインテリアまで拡張する。彼女が作る全ての製作物の色合いは布の白である。その空間の中には誰でも見たことがあるような生活の雑貨や家具が並んでいるが、全てが白いためにそれは夢の中か、あるいは平行世界のメタバースのような不思議な空気が漂っている。それは過去の思い出かもしれない。何れにしろ「2001 年宇宙の旅」の最後のシーンのような無機質な質感とは違って、そこはかとなく暖かく，懐かしい空間に思える。糸はその思い出をつなぎ合わせる魔法かもしれない。白によるある種のミニマルな空気と、潔癖な清潔感が独特の世界を作り出す。空間全体を作品とする大型のインスタレーションであり、また観客が体感することができる没入型の作品ということも出来る。黒い糸は世界を一つにまとめる洞察の隠喩かもしれない。

作品イメージ｜「日々を重ね、」Mixed media_installation_2022

津野青嵐　《ねんねんさいさい》

幼少期の津野にファッションへの道を示した祖母が臥床生活になったことから制作した本作は、祖母のために”オーダーメイド”した衣服である。祖母が長年集めてきた布と 3D ペンで作られた衣服には、肌に触れる部分に柔らかい布を利用し、介護ベッド上でも着られるようにするなど、祖母と共に身体の変化に向き合ったことがわかる。本作のタイトルは、祖母がよく口にする「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」（意訳：毎年、花は同じように咲くが、人の変化は同じではない）という言葉からくる。牡丹の花をモチーフにした本作は津野と祖母の家族愛を体現し、また自宅介護の中で見え隠れする生死の輪郭を示すようでもある。
津野は作家活動と並行して精神科の看護師として当事者研究という、日常の様々な体験や困りごとを”研究テーマ”として扱い、自身がそのテーマについて仲間と共に研究する自助的な活動の現場に触れてきた。現在大学で衣服と「ファット」な身体の関係を研究する津野にとって、研究とは自身と向き合うことを意味する。展示されるドローイングたちからも読み取れるように、本作は津野と祖母に共通する「ファット」な身体との向き合い方を扱う、いわば自身の「当事者研究」の結果の一つでもある。それは単なる精神科学的な取り組みより、もっと個人史的で、慎重な所作である。

スタジオ ゲオメトル　《Changes of the Mountain》

機織機などを扱っていた旧山叶の建物とその倉庫を結ぶ回廊部分に設置されているのは、チェコ共和国のアーティストユニット、スタジオ ゲオメトルによるタペストリーである。表面に浮かび上がるドローイングは、機に経糸を張った状態で描かれたもので、そこに緯糸を織り込んで一つの世界観を作っている。20 世紀初頭の手織り織機や、19 世紀末から続く織物工房の工業用織機を用い、チェコのテキスタイルの歴史を踏まえているが、糸の上で踊るフリーストロークのみずみずしい抽象表現は、テキスタイルとは思えない自由な表現を示しており、そのため現代美術の文脈でも展示の機会を得ている。これらは自然豊かなチェコでの制作環境に加え、インドネシアや日本等での滞在経験がインスピレーションの源泉となり、内的、外的な心象風景を表出している。伝統と革新、固有の文化と国際性、二人のアーティストの個性が、豊かな色彩をもって幾何学的（ジオメトリック）に織り上げられた作品である。

協力：チェコセンター東京
作品イメージ｜Photo by Gabriel Urbanek